

「瀬戸内の地域資源」特集にあたって

—研究目的ならびに成果と課題—

浅野 敏久*

一昨年、『日本研究』誌は定期号とは別に「厳島」特集号を刊行した。これは本誌が21世紀を迎える節目として計画されたものであると同時に、総合科学部における研究助成制度「総合科学研究プロジェクト」を利用した共同研究の成果を報告するものでもあった。学際的な研究の必要性は、さまざまな場面で強調されているものの、文系から理系までを幅広く横断するような研究となると、現実にはあまり進んでおらず、掛け声ほどには重んじられないまま、いくらかの有志による模索が続いている状況にある。しかし、だからといって総合的学際研究の試みに見切りをつけてしまってよいものではなく、価値観が混乱し、不確実で不安な今の社会経済状況において、総合的な見地からの学問の必要性はますます高まっている。

今回の特集号は、先に「厳島のアイデンティティ」を課題とする共同研究を行ったメンバーに工学・教育学両研究科の研究者を加え、広島大学の全学研究支援事業である「文・理ジョイントプロジェクト」として採択された「資源論的にみた『瀬戸内』再評価に関する総合的研究」の成果を取りまとめたものである。文・理を横断する総合研究というと、その意味や意義について理念的には理解できるものの、現実的な実践となると具体的な研究イメージがわきにくい。そこで、共同研究を行う機会と場を意識的に設けて、それを維持し、さまざまな情報交換やそれぞれの研究に対する意見や疑問をぶつけ合う中から、各人の研究へのヒントや新しい研究課題の発見が得られるのではないかと考え、このような活動を続けている。その意味で、厳島の研究から継続して共同研究の場を確保してきたことには意味があるし、折々に成果を出し続けることも研究を先に進めていくために

不可欠である。

今回の共同研究が当初、目指しただけの成果をあげたかを問えば反省点をいくらでもあげることができるが、最低限、本特集号を刊行するまでにはたどりつけた。今後、共同研究として次の場面を設けるつもりであり、研究は今後継続される。回数を重ねるごとに積み残される課題は大きくなる一方だが、これからも試行錯誤を続けていきたい。

ところで、本特集のもとになっている「資源論的にみた『瀬戸内』再評価に関する総合的研究」についてだが、その研究目的は当初以下の通りであった。

世界的に地球環境問題への関心が高まり、サステナビリティ(持続可能性)への配慮が重要な課題となっている。グローバルな環境問題への対応として、ローカルな実践、言いかえればサステナブルな地域づくりが求められている。このためのアプローチのひとつ、ないしは前段階として地域を資源論的に見直してみる試みが考えられる。本研究ではこのような問題意識のもとに、生態系的なまとまりが認められる瀬戸内地域を取り上げ、地域を資源論的に見直す方法を模索する。その際に利用面からとらえるプラスの意味での「資源」と、不適切な利用が社会に不都合をもたらすというマイナスの意味での「資源」の両面を視野に入れ、瀬戸内地域の資源とは何か、その保全・利用は如何にあるべきかについて学際的・総合的な検討を行う(プロジェクト申請書、2001.2.21.付)。

研究の進め方として、分野を異とする14名の共同研究であるため、「瀬戸内に向けられたまなご

*広島大学・総合科学部広域文化研究講座

しの変遷]、「瀬戸内の自然環境と人々の生活」、「産業・生活様式の変化と環境変化」という大まかな3つのテーマについて、各担当者が相互に情報交換しながら、それぞれ研究を進めることを基本とし、その成果を踏まえつつ、研究会の場などで成果報告や議論を行うこととした。そして、最終的に「地域資源の再評価と今後」について討議することとした。

しかし、結果からいうと、はじめに設定した3つのテーマに即した個別研究がなされたというよりは、仕事を進める中でテーマを組み替えることになった。これは、相互の研究の接点・共通点を重視する方向に軌道修正した結果であり、おぼろげながらもメンバー間で共通する課題を絞り込めたという意味では作業が前進したあらわれでもある。

組み替えたテーマというのは、「瀬戸内の資源としての傾斜地の利用」、「歴史的遺産の再考と活用」、「瀬戸内海の観光・教育面での利用」である。

瀬戸内地域では、中核的な都市とその周辺地域を別にすると、島嶼部や沿岸の急傾斜地域などでは特に過疎化が進行する現状にある。しかし歴史的に振り返ってみると、かつては交通の大動脈に直結し林野や耕地の乏しさにも関わらず多大な人口を抱えて繁栄した地域でもあった。例えば、帆船時代には潮待ちの港町が立地するなど、離島はそれぞれものが資源であり、乏しい林野も沿岸部の膨大な燃料需要に結びつくことで高度な利用がなされ、やがて急傾斜の段々畑も柑橘栽培によって高い所得を実現した。そのような資源の活用の中で独特の景観が生まれ、それが瀬戸内地域という一つのイメージとして今に受け継がれている。

かつては白砂青松が瀬戸内の景観美を表すキーワードとして用いられたが、今やそのような環境は失われ、はるかに人工的な景観が卓越するようになった。瀬戸内を代表する景観は、白砂青松よりもむしろ、歴史的な経緯も含めて、急傾斜にはりついて暮らしてきた人々の営為の景観ではないだろうか。林野の資源を徹底的に使いつくし、各地にはげ地を出現させ、耕して天に登るといわれ

た段々畑をつくり出し、さらに都市域では急な斜面を宅地化し密集した住宅景観をつくり出してきた。そしてこのような傾斜地は、モータリゼーションが進行し、安全や環境への関心が高まる現在、時代のニーズに合わない地域として取り残されていく傾向がみられる。山林はブッシュ化し、山火事の危険性を増すとともに、イノシシなどの棲息地としてその数を増やし、農作物等への被害を拡大する一因になっている。傾斜地の農地は、農作業の効率が悪く、農業従事者の高齢化が進む中で耕作放棄されるところが増えている。耕作放棄地がさらにイノシシの棲息地となり、残された農地への被害を拡大させているという報告もある。住宅地においても急傾斜地では災害に見舞われる危険性が高く、自家用車利用がしにくいとか、緊急車両の通行が困難であるなど交通環境の悪さが目立つ。そのため若い世代が流出し高齢化が他の住宅地以上に深刻になってしまう。土砂災害に関していえば、急傾斜地危険箇所数でも土石流危険渓流数でも広島県が全国1位であり、岡山や兵庫、山口県なども上位に位置する。まさに瀬戸内地域の特徴の一つといえるのである。

本研究では、このような傾斜地という場所に一つの焦点をあてられないかと考えた。内容としては、瀬戸内海沿岸地域の地形・地質学的な分析の他、瀬戸内における自然災害と人々の生活、山火事跡地の植生の回復等も視野に入れた土壌・地下水に関する研究、果樹園地についての景観生態学的研究、近世の林野利用の実態に関する研究などを今回は報告することになる。過疎や高齢化問題などの社会的な現状分析については今後の課題である。

傾斜地というテーマ以外に、「歴史的遺産の再考と活用」と「瀬戸内海の観光・教育面での利用」というテーマの研究も同時並行して進めた。瀬戸内海は、歴史的にさまざまな出来事を経験しており、特にかつては日本の大動脈の一端を担う地域でもあり、歴史そのものや歴史的遺産をどのように再評価し、反省すべき点を反省し、今後にいかにかかしていくのかは大きな課題である。ただし、現段階では各研究間の関連づけはうまくできてお

らず、大まかにくりとして関連する論文をまとめたにとどまる。歴史に関する研究はすでに数多くの蓄積があり、それらを視野に入れながら、新たな視角を持ち込めるかどうかは今後の課題である。また、後者の「瀬戸内海の観光・教育面での利用」に関しては、同時期に科学研究費による共同研究(平成13・14年度基盤研究C(2)「瀬戸内の『観光環境』の維持と再生」、代表者フク・カロリン)を行っており、双方に関係するメンバーの成果の一部を本誌に掲載した。瀬戸内の資源を考える上では、海そのものを取り上げる必要が当然あり、今後を展望する意味を込めて、観光や環境教育的利用といった比較的新しい方向について取り上げた。そのかわり漁業空間や水産資源等については全く扱っておらず、メンバーの人選も含めて今後の課題といえる。

また、本研究においては、担当者による報告と討議からなる研究会に加え、3回の現地研究会(巡検)も行った。第1回巡検(2002/07/27・28)では広島県生口島等で花崗岩の風化、山火事流域の物質移動などをテーマとした。第2回巡検(2003/02/02)では広島県呉市の急傾斜地に焦点をあて、平成11年の集中豪雨と平成13年の芸予地震の被災地の現状などを視察した。第3回巡検では、香川県の直島と豊島を訪れ、全国的に問題になった産業廃棄物の現場(豊島)とその中間処理施設受け入れを決めた直島を視察した。ここでは、産廃問題だけではなく、船上から金属精錬工場からのかつての煙害の傷跡を見、その規模の大きさといまだに残るその影響に驚かされた。また、直島においてはベネッセコーポレーションの企業メセナの貫とされる文化村プロジェクトについても視察した。三菱マテリアルとベネッセという2

つの企業の存在と離島の社会経済の関係について考えさせられた。豊島においては、「有価物(=資源)」という名のもとに「廃棄物・ゴミ」が搬入されつづけ、それがいかに豊島の人々の暮らしに影響を与えたのかを見聞した。豊島事件については報道などで知ってはいたが、現地を訪れることで問題を再認識した。特に本研究は「瀬戸内の資源の再評価」をキーワードとしており、「資源」という言葉の意味に対してより慎重であるべきことを実感することができた。これらの巡検では、直島文化村以外、一般的に理解されるプラスの意味での資源とはいえないものを中心にまわった。直島文化村の活動にしても、現代美術を島という空間の中で展開しているものであり、従来型の歴史的な遺産を守り活用していく町並保存とは相当に異なる性格をもっている。これらの経験からえられた示唆は大きかったが、まだそれを研究成果に繁栄させるまでには至っていない。今後の研究に生かしていければよいと考えている。

最後に、本誌は、上に述べた3つのテーマごとに各人の研究成果を掲載したものである。あくまでも個別研究を束ねた論文集であり、共同研究の最終的な課題とした「地域資源の再評価と今後」を検討した部分、すなわち共同研究の結論については掲載していない。それは、まだ結論を出すに至っていないからというのが正直なところであるが、ただし、今後もこれまでのような研究を続け、相互に情報・意見交換を重ねる中で、よりじっくり検討すべき事柄であると判断したからでもある。今後、積極的に共同研究の場をつくることに努め、さらなる研究を続けようと考えており、その中でこの課題についての検討を深めていきたい。